メルヴィル

破滅への航海者

杉浦銀策

英米文学作家論叢書

ルヴィル

破滅への航海者

杉浦銀策

冬樹社

MANMAN MEMOUE

著者略歴
杉浦銀策（すぎうら　ぎんさく）
1933年生まれ　東京大学大学院修士課程修了　アメリカ文学専攻　現在，東京都立大学助教授　訳書　トマス・ハインド『性の高みに』（講談社），ウィリアム・ギャス『アメリカの果ての果て』（冨山房）等

英米文学作家論叢書　8

ハーマン・メルヴィル

昭和56年5月20日　初版第1刷発行

定　価　1600円
著　者　杉浦銀策
発行者　高橋直良
発行所　冬樹社
東京都千代田区神田神保町3-27-6
郵便番号101　振替　東京8-7757
電話　東京　03(264)0346(代表)

印　刷　稲葉印刷株式会社
製　本　株式会社　美成社
装幀者　三嶋典東

©Ginsaku Sugiura 1981
0098-10394-5190
本書の内容の一部あるいは全部を，無断で複写複製（コピー）することは，法律で認められた場合を除き，著作権者および出版社の権利の侵害となりますので，その場合には予め小社あて許諾を求めてください。

目次

はじめに——孤独な作家像……5
一　原始的無垢の楽園と地上的悪の悲しみ……14
二　「ロマンス」小説と前衛……35
三　世界と存在(一)……56
四　世界と存在(二)……81
五　ニヒリズムの深淵……104
六　仮面の登場……126
七　キリストを求めて……154
八　破滅への航海者……177

おわりに——ペシミズムの根源……204
あとがき……213
メルヴィル略年譜……217
メルヴィル主要文献
索　引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

ハーマン・メルヴィル

はじめに——孤独な作家像

今日『白鯨』（一八五一年）の作者として知られるハーマン・メルヴィル（一八一九年—一八九一年）は孤独な生涯を送った作家である。あるいは孤立感に取り憑かれた作家であった、と言ってもよい。もちろん現在彼に関する伝記的資料が可能な限り掘り起こされ、その資料がジェイ・レイダという熱烈なメルヴィル信奉者によって年代順に整理され、『メルヴィル航海日誌』二巻（一九五一年）となって結実し、また同じ資料に基づいて執筆されたレオン・ハワードの正確無比な評伝『ハーマン・メルヴィル』（一九五一年）が出るにおよんで、一九二〇年代から第二次世界大戦前にまでにつくりあげられたメルヴィルの神秘的かつ悲劇的作家像がかなりの修正をほどこされることとなった。しかしもともと偉大な芸術家における精神の謎などというものは、客観的な伝記資料の積み重ねのみからは測り知ることのできない深淵を秘めていて、最終的には個々の作品を通してしかその奥深い精神風景をのぞき見ることができない態のものだと思う。

まず伝記的事実としては、メルヴィルがわずか十二歳のとき、父アランが半狂乱のうちに病死

し、それから十数年後、こんどは長兄のガンズヴォートが三十歳の若さで駐英公使館付書記官として客死したということを挙げなければならない。ガンズヴォートもまた、父と同じく生前すでにかなりの精神的バランスを失っていたと疑われるのである。つぎにメルヴィルの息子二人の死についても触れておかなければならない。メルヴィルは、『詐欺師』（一八五七年）の執筆を最後に小説の筆を折ってからおよそ十年後の一八六六年、南北戦争をうたった『戦争詩集』を出したが、千二百六十部刷ったうち一年間に売れた部数は四百八十六部にすぎず、まもなく世間から完全に忘れ去られてしまう。そして彼がポルトガルのルネッサンス期詩人カモエンズを読みながら自らの孤独を慰めているうちに、一八六七年九月長男のマルコムがピストル自殺して果てた。さらに追い討ちをかけるように翌年の四月には次男のスタンウィックスが家出し、何年間もほとんど家に寄りつかぬまま放浪の途中で病死してしまった。

父アランの死がメルヴィルにとっていかに大きな衝撃であったか、というよりはそれによってもたらされた傷痕が、長ずるにつれていかに彼の精神の奥深くまで喰いこんでいったかということは、自伝的色調の濃い『レッドバーン』（一八四九年）や『ピェール』（一八五二年）の読者にはっきりと見てとれることである。またほとんどあらゆるメルヴィルの作品の主人公が孤児として描かれていることからも、メルヴィル自身が何か大きな力によって父を奪い取られた、あるいは父が少年メルヴィルを棄ててこの世を去った、という意識に取り憑かれていたのではないかとさえ疑われる。

父アランは、たとえば親戚のガート・ガンズヴォートに宛てて「聖書をきみの北極星としたま

え」[1]と書き送ったこともあるほどに信仰と仕事を分かちがたく結びつけていた商人であった。その父が一八三二年、莫大な借財を残して精神錯乱のうちに死んでいった。そして彼は死の床につきながら、聖書の「詩篇」第五十五篇第四節および第五節「わが心わがうちに憂へいたみ死のもろもろの恐懼わがうへにおちたり。おそれと戦慄とわれにのぞみ甚だしき恐懼われをおほへり」という句に印をつけ、その後同じ個所の余白に妻マライアが「これは主人がはげしい苦しみのために知力を失う数日前につけた印。神さまは不可解ななされ方をする――」と書きこむことになる。

ところで父アランはかなり自由な雰囲気のユニテリアン派教会で育ったのに対して、母のマライアはカルヴィニズムを奉ずる「オランダ改革派教会」で育った女性で、子どもたちはすべてこの後者の教会で洗礼を受けている。母が「神」という言葉を使うとき、それは紛れもなくカルヴィニズム的神のことである。カルヴィニズムというと、われわれはただちに旧約的神の前における人間存在の罪性と悲惨、人間が救われるか否かは前以て決められていて、人間の自発的な努力によってはいかんともしがたく、ひとり絶対の神の恩寵に縋るしかないという暗い予定説を想い起こす。たえず聖書を身近かに置いていた人が何故あのように苦痛に悶え、精神錯乱のうちに惨めな死に方をしなければならないのか――母マライアの書き込みにはそのような思いがこめられていたのかもしれない。また同じような疑念がメルヴィルの胸中にも潜んでいなかったという保証はなく、それがやがて暗いペシミズムや神の正義についての懐疑へと発展していったともいうべく、たとえば「キリストの象徴」たる仔羊が雷に打たれて死ぬ様を見て、キリスト教の信仰

を棄てた『クラレル』（一八七六年）のネイサンという人物を創り上げたメルヴィルの脳裡には超越的絶対の神と有限者たる人間とのあいだにおける激しい断絶感が渦巻いていた。(2)

父は莫大な負債を残して死亡し、あとに取り残されたメルヴィル一家はいやというほど経済的困窮の恐ろしさを味わうことになる。メルヴィル自身も当時通っていた学校を中途退学せざるを得ず、以来転々と職を変え、将来の見通しも立たぬまま外国航路の貨物船に乗り組んだり、短篇の習作に筆を染めたり、失恋を体験したり、あるいは衝動的に放浪の旅に出たり、おそらく暗澹たる思いに駆られながら日々を過ごしたものと考えられる。そして最も身にしみて感じたことは借財・債務の恐ろしさであったらしく、彼の作品にはことあるごとにこれと関連した表現や比喩が頻出する。

このように陸上で落ち着かぬ生活を十年近くもつづけたあと、いよいよ一八四〇年暮れニューベドフォードで捕鯨船アクーシュネット号と乗船契約を結んだメルヴィルは、年の明けた一月三日対岸の町フェアヘイヴンの港から大海に向けて出航する。そして一八四二年六月彼は南太平洋のマルケサス諸島水域に達した捕鯨船から相棒とともに脱走し、ヌクヒーヴァ島の奥深く潜入する。処女作『タイピー』（一八四六年）の世界はここから始まるのだが、とにかくこうして四年近くにおよぶ海外の放浪生活でさまざまな体験を積んだあと作家生活に入る。つまり長年にわたる外的世界の体験を求めての遍歴から、内的世界の体験を求めての精神の遍歴へと移行してゆく。

メルヴィルが数ケ月ほどかけて完成した『タイピー』の原稿はアメリカの出版社に断わられたため、その頃ちょうどロンドンの駐英公使館付書記官に任命された長兄ガンズヴォートがその原

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

稿を携えて英国に渡る。そして彼の奔走のおかげでようやく英国の出版社との契約が成立し、つづいてアメリカ版も出る運びとなる。出版とともに大変な評判を呼び、気を良くしたメルヴィルは続篇ともいうべき『オムー』（一八四七年）の執筆に取りかかった。だがその間ロンドンの下宿先で病いに倒れた兄は「男も女もぼくの心を動かさない」というハムレットの独白めいた言葉と、シェイクスピアの『以尺報尺』における死の瞑想として有名なクローディオの台詞を書き記してよこす。それから一ヶ月後の一八四六年五月、兄は独りわびしく異郷の地で死亡するのだが、それとも知らず、死後二週間以上も経ってから兄を励ます手紙を書き送ったメルヴィルはこの兄の不幸をどのように受けとめたのだろうか。

メルヴィルは作家生活に入ってからも、国外旅行に出かけるとき以外は日記というものをつける習慣のない人だっただけに、この折の悲しみと衝撃を伝えてくれる記録はない。しかしどうやら父と同じくある種の精神錯乱のうちにこの世を去った――こう書けばやや誇張になるが、生前すでに大きく精神のバランスを失っていたことについては第三者の証言がある――兄の死は、メルヴィルをしてかなり複雑な心境にさせたにちがいない。なぜならばメルヴィルが『ピェール』の若き主人公について「彼自身の遺伝的狂気の素因」（『ピェール』第二十一部第二章）云々と述べたとき、彼自身、自らの内に秘められた狂気の不安に耐えながら創作をつづけたとさえ疑われるからである。

いや、作家としてのメルヴィルの孤独はなにもこうした家庭的不幸にのみに限られるわけではない。それはなによりもまず三十七歳の若さで散文創作の筆を折ったという事実につきまとう挫

折感に求めなければならない。なるほど『タイピー』、『オムー』、『レッドバーン』そして『ホワイト・ジャケット』（一八五〇年）等は世間的にもかなりの成功を収めることができた。しかしこれらの作品は彼自身必ずしも高く評価しているものではなく、逆に彼が全身全霊を傾けた大作はすべて不評のうちに終わり、『ピェール』にいたっては「狂気の書」という烙印を押されてしまう。

かくして『詐欺師』（一八五七年）を最後に小説の筆を折るにいたるメルヴィルの心情は余人の想像を絶するものがあったはずである。一八五六年十一月、聖地巡礼の旅に向かう途中、『詐欺師』の原稿を携えて英国のリヴァプールの米国領事館に先輩作家ナサニェル・ホーソンを訪ね、今や自分は「破滅の覚悟ができている」と率直に告白したとき、それはなににもまして過去十年余りにおよぶ作家経歴に終止符を打つ覚悟の謂であったと思われる。むろんそれ以後の詩人・作家としてのメルヴィルは決して「破滅」してしまったわけではなく、よく孤独と絶望に耐えて七十二歳の長い生涯を無事に終えはする。そして死を目前にして優れた中篇『ビリー・バッド』（一九二四年）を書きあげさえする。だが少なくとも新しい小説形式探求に激しい情熱を燃やした彼の作家経歴はやはり『詐欺師』とともに終わり、その意味で彼は告白通り「破滅」したと見做すことも可能なのだ。

今日われわれが一八六〇年代に接近しつつある時期のアメリカ文学の状況を振り返ってみるとき、そこにはたんに一人の作家の創作力の枯渇という以上に、一つの時代的変化、新しい時代の到来という一種の運命的な歴史の力が作用していたような気がする。時代は南北戦争を前にして大きく転換しようとしていたのであり、ポー、エマソン、ソロー、ホーソン、ホイットマン、メ

ルヴィル等によって築き上げられた十九世紀アメリカ文学の黄金時代はその歴史的使命を果たし、終焉に向かいつつあったのだ。ただメルヴィルの場合、その思想と芸術に対する熾烈な探求の故にかえって同時代の読者からはもちろんのこと、南北戦争から二十世紀初頭にかけての長い期間にわたってすら誤解、ないしは無視されてしまい、第一次世界大戦以後の読者に理解と再評価の夢を託さなければならない運命にあったのである。このような事情に思いを馳せてみるとき、彼の作家としての孤立感はいっそう強く浮き彫りにされ、生涯の後半における彼の心境は秋風落莫の感があったのではないかと推測されるのだ。

メルヴィル文学の最高峰はいうまでもなく『白鯨』である。しかし『マーディ』(一八四九年)、『ピェール』、『詐欺師』等のもつ現代的意義は決して無視できるものではなく、『白鯨』を含めたこれら一連の長篇に深く内包される不気味な西欧ロマン主義の影や二十世紀後半のポスト・モダニズム文学的認識論の先取りはまさに驚嘆すべきものがあり、われわれはそこにメルヴィルという作家の栄光と孤立性を垣間見る思いがするのだ。したがって『詐欺師』以後の彼の「破滅」はそのような時代に先んじた文学的特質に起因する、いわば強いられた宿命であったと言えよう。『戦争詩集』(一八六六年)以後のメルヴィル文学はもはや世間的声価を得ようして書かれたものではなく、ひたすら自分自身にのみ向かって語られ、いわば自分自身を納得させるための私的な表白であり、一万八千行におよぶ長篇物語詩『クラレル』がその典型であった。この長大で難解な物語詩は同時代の読者の理解を期待してのものとは到底思えない。彼はこの中で在りし日のホーソンとの交遊を振り返り、西欧文明におけるキリストおよびキリスト教の意味と運命を問い、

南北戦争以降におけるアメリカ民主主義の暗黒に対する限りなき幻滅を吐露し、ヨーロッパ全土を揺さぶった革命の嵐およびそこに押し寄せる無神論の波への懐疑を表明し、ダーウィンの進化論に支配されつつある荒涼蕪雑な「現代」、あるいはそうした砂漠に生きる人間の運命に思いを馳せる。そして死を前にして一応の「完結」を見た『ビリー・バッド』も、当時の彼における創作姿勢という観点からすれば、『クラレル』の執筆とさして変るものではなかったと思う。あるいはこう言い換えてもよい。『ビリー・バッド』執筆当時、メルヴィルは詩集『ジョン・マーと他の水夫たち』（一八八八年）や『ティモレオン』（一八九一年）等を私家・限定版として出していたが、『ビリー・バッド』も同じようなかたちで出版したいと思って、その前書きを書き足しているうちに、『クラレル』同様、作者の思想面において一段の進境を示す重要作品になってしまったのだと。

私は、『ビリー・バッド』執筆時の作者が新たな小説形式の開拓という芸術的意欲をどれだけ強く抱いていたものか、よく分からないし、また同じく三人の主要人物を軸として展開される中篇「ベニト・セレーノ」（一八五五年）と比較してみて、『ビリー・バッド』にどれだけ技法上の進展があったか、いささか疑問であると思う。しかし新たな技法上の進展が少ないとしても、そこには紛れもなく作者の側の成熟した思想上の深化が見られ、その思想のドラマ化は見事というほかないものだ。つまり『タイピー』から『詐欺師』にいたるまで十年余の作家的経歴をもち、なお長篇物語詩『クラレル』を上梓した文人にしてはじめて可能な秀作ということである。『ビリー・バッド』におけるさまざまな人物描写のイメージの多くがその昔書かれた数々の小説作品や詩篇のそれの繰り返しだとしても、それが自作のパロディ的作品だということでは決して

ない。老骨にむち打って推敲に推敲を重ねるうちに到達したメルヴィルの新たな思想的局面は、彼の晩年の文学的仕事を飾るのにふさわしい重量感を備えているのだ。かくして『タイピー』に始まる己れの文学全体の大きな円環を閉じるのに恰好の作品『ビリー・バッド』を書き上げたメルヴィルは、ついに自らの孤独を完全に突き抜けることができたともいうべく、われわれはこの強靱な知性と精神の持ち主に深い敬意を抱かざるを得ない。

しかしわれわれは、『ビリー・バッド』における思想のドラマ化がどういうものであるかということについて論述する前に、メルヴィルの長い、長い精神的遍歴の軌跡をたどってゆかねばならない。

注(1)　一八二四年十月の手紙。ガート・ガンズヴォートはメルヴィルの母の甥にあたる海軍軍人で、『ホワイト・ジャケット』や『ビリー・バッド』等で言及されているいわゆる「ソマーズ号事件」に深く関与した人物である。「ソマーズ号事件」とは、一八四二年米国軍艦ソマーズ号内で反乱罪を適用された三人の乗組員が正当な手続きを経ないまま艦長の独断で処刑されてしまい、世論を騒がせた事件のことである。ガートは海軍士官として裁く側に立っただけに、メルヴィルの関心も深く、『ビリー・バッド』の素材の一つになっているとも言える。しかし本書の『ビリー・バッド』論では、ほかにもっと論ずべき多くの重要事項があるとの立場からこの「ソマーズ号事件」には敢えて触れるのを避けた。

(2)　『クラレル』第一部第十七歌参照のこと。

一　原始的無垢の楽園と地上的悪の悲しみ

メルヴィルの文学は処女作『タイピー』における原始的無垢の楽園の探求から始まった。しかしこのように書き出すと、たちまちさまざまな問題がわき起こってくる。

まず地上の楽園と原始的無垢の神話といえば、その昔ヨーロッパ人が抱いていたユートピア思想的幻想の憧れの対象となったものは新大陸アメリカであったはずである。そしてのちにこの新大陸アメリカに移住してきたヨーロッパ人たちは依然としてそのような幻想を抱きつづけようとしてきた。それなのに何故『タイピー』の語り手はアメリカを逃れて、南海の島々に地上の無垢と楽園を求めようとするのか。

かつて十七世紀アメリカのピューリタンたちは旧大陸ヨーロッパにおける伝統の束縛と因襲の抑圧を逃れて信仰の自由を実現すべく大西洋を渡り、〈千年至福思想〉を抱きながらニュー・イングランドの地にキリストの霊が支配する楽園を築き上げようとした。たとえばエドワード・ジョンソン（一五九八年―一六七二年）というピューリタンはその十七世紀半ばの著作『奇跡を行なう

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com